

My new friend

—新しい友達—

石井 睦美 作

高次 章子 訳

あたら ともだち
新しい友達

いしいむつみ
石井睦美

お父さんの 仕事の 都合で ロンドンに 行っていた まりちゃんが 帰ってきた。

二年前、わたしが まりちゃんの ロンドン行きを 知ったのは、まりちゃんのお別れ会
の 三日前の ことだった。「だって、ひろに 言ったら、泣いちゃうって 思ったんだもん。

それで、ずっと 言えなかったの。」 まりちゃんは 言った。

金曜日の 三時間目と 四時間目を 使って、ランチルームで お別れ会を した。クラス
全員と 先生の ほかに、お母さんたちも 大勢 来て、みんなで、歌を歌ったり ゲーム
を したりした。 まりちゃんは、みんなから「まりちゃん、まりちゃん」って 言われて、
なんだか うれしそうに 見えた。最後の あいさつの とき、まりちゃんのお母さんは、
とちゅうから なみだ声に なり、 それに つられて、何人かの おかあさんたちも、ハン
カチで 目を おさえたり していた。

けれど、まりちゃんは 泣かなかった。 わたしも 泣かなかった。

明るく日の 土曜日、 お昼ご飯を 食べてから、お母さんと もう一度、まりちゃんの
家に さよならを しに 行った。 引っこしの 後みたいな、 空っぽの 家の 中から
出てきた まりちゃんを 見たとき、 鼻の おくが つうんとした。

「ほんとに 行っちゃうんだね。」

「荷物は もう送っちゃったの。 今日 は ホテルに とまるんだ。」と、まりちゃんは 言った。

「まりちゃん、これ。」

ずっと ポケットの 中に 入っていた 手を出して、にぎりしめた まま、まりちゃんに 差し出した。

My new friend

Mutsumi ISHII

Mari returned from London where she had lived because of her father's job.

It was just three days before her farewell party, two years ago, that I got to know she was moving to London.

"I knew that you(Hiro) would cry, so I couldn't tell you that I was moving away." Mari said.

We made arrangements to have her farewell party in the lunchroom during third and fourth class. All the classmates, our teacher and the mothers came to sing songs and play games with her. They all gave Mari special attention and often called her name, so she somehow seemed to be very happy. When Mari's mother gave a speech at the end of the party, she almost burst into tears, which made some of the mothers cry, as they wiped tears with their handkerchiefs.

But Mari didn't cry.

I didn't cry either.

The next day on Saturday, after I finished having lunch, I went to Mari's house to say goodbye once again. When I saw her coming out of her empty house after having moved, I felt a pain deep in my nose. (I almost cried.)

"You are really going."

"I've already sent the luggage and we'll stay at the hotel tonight." Mari said.

"Mari, here you are."

I pulled out my hand from my pocket and still holding something, I handed it over to Mari.

「あつたかくなってるよ。 なんの ^{きゅうこん} 球根。」

「クロッカス。 あっちに ^い 行ったら ^う 植えてね。」

「うん。 ^{ぜったい} 絶対。 ^{ぜったい} 絶対 ^う 植えるからね。」

^{こんど} 今度は、まりちゃんが ^{きゅうこん} 球根を ^{なか} ポケットの中で ^な にぎりしめた まま、まりちゃんは ^あ 空いている ^{ひだりて} 左手で、わたしは ^{みぎて} 右手を ^ふ ぶって、さよならをした。

まりちゃんが いなくなると、^{きょうしつ} 教室が ^か すうすう するような ^{かん} 感じが ^{した} した。わたしは ^{いっしょう} 一生けんめい ^{てがみ} まりちゃんに ^か 手紙を ^{かあ} 書いて、お母さんに ^だ たのんで ^だ 出してもらった。まりちゃんからも、^{おな} 同じだけ ^{てがみ} 手紙が ^き 来た。 ^{きいろ} 黄色い ^{はち} クロッカスの ^う はち植えを ^も 持った ^ま まりちゃんの ^{しゃしん} 写真も ^と とどいた。 ^{わたし} わたしが ^{あげた} あげた ^{きゅうこん} 球根が、 ^{ちゃん} ちゃんと ^{はな} 花を ^さ さかせたんだ。 ^{その} その ^{しゃしん} 写真を、 ^{わたし} わたしは ^{つくえ} つくえの ^{うえ} 上に ^{かざ} かけた。

そのうち、^{てがみ} 手紙と ^{てがみ} 手紙の ^{あいだ} 間が ^{すこ} 少しずつ ^あ 空くようになっていった。 ^{クリスマス} クリスマスカードと、^{しゅちゅう} 暑中みまいと、^か クリスマスカードを ^か 書いた。

まりちゃんからの ^{にかいめ} 二回目の ^{らいねん} クリスマスカードには、「 ^{しがつ} 来年の ^{かえ} 四月に ^{ごねんせい} 帰るね。 ^{ごねんせい} 五年生から ^{また} また ^{いっしょ} いっしょだよ。 ^{よいお年} よいお年を。」と ^か 書いてあった。

そして ^{きょう} 今日、まりちゃんは ^{ほんとう} 本当に ^{かえ} 帰ってきた。

げんかんの ^{まえ} 前に ^た 立っている ^{まりちゃん} まりちゃんを ^み 見たときは、 ^{とても} とても ^{びっくり} びっくりしたけれど、
^{にねん} 二年ぶりの ^{ほんもの} 本物の ^{まりちゃん} まりちゃんに、 ^{しぜん} 自然と ^{かお} 顔が ^{わら} 笑ってしまうのが、 ^{じぶん} 自分でも ^わ 分かった。
まりちゃんも、 ^{にこにこ} にこにこ ^{して} している。 ^{にこにこ} にこにこ ^{しながら} しながら、

「とつげんで ^{おどろ} おどろいた。 ^{いちばん} いちばん先に、 ^{ひろ} ひろの ^{ところ} 所に ^き 来たんだよ。」

“It’s warm. What bulb is this?” Mari asked.

“Crocus,” I answered and asked, “ Will you plant it when you get there?”

“Yeah, definitely I will.” She promised.

This time, grasping the bulb with her right hand in her pocket, she waved to me and I waved back saying goodbye.

After Mari had left, I felt that our classroom was hollow. I wrote as many letters as possible to Mari and asked my mother to send them. Mari answered all the letters I wrote to her. She also sent me a picture of herself holding a yellow crocus in a pot. I put the picture on my desk.

Soon after that, our letters became less frequent. I wrote a Christmas card, a summer greeting card, then a Christmas card again.

I received a Christmas card for the second time from Mari, “I’ll be back next April. We will be going to school together from fifth grade. A Happy New Year.”

Today, she was really back.

When I saw her standing in front of the front door of my house, I was very surprised to see Mari’s face after two years. But I couldn’t help smiling. Mari was also smiling.

“Were you surprised to suddenly see me? I wanted to come to your place first.

あのとき、いちばん 最後^{さいご}に ひろに 話^{はな}したから、帰^{かえ}ったときは いちばん 先^{さき}って 決^きめてい
 たんだ。」と 言^いった。

「月曜^{げつよう}から 学校^{がっこう}に 行^いくから、そしたら 遊^{あそ}ぼうね。」

「また、いっしょの クラスだと いいね。もし ちがう クラスに なっても、遊^{あそ}ぼうね。」

約^{やくそく}束^{そく}を して、 さよならを した。 いつでも 会^あえる さよならだ と思^{おも}うと、さよなら
 が うれしかった。

学校^{がっこう}は 五年生^{ごねんせい}で クラスがえが あるから、 今^{いま}の クラスは、 まりちゃんと いた クラ
 スとは 少^{すこ}し ちがう。 まりちゃんは、 とまどわない だろうか。 今^{こんど}度も また、 同^{おな}じ ク
 ラスに なれるだろうか。 急^{きゅう}に 心^{しんぱい}配^{ぱい}に なって、お母^{かあ}さんに きくと、

「そうね。 同^{おな}じクラスに なるとは かぎらないけれど、 でも、 まりちゃんなら だいじ
 ようぶよ。 心^{しんぱい}配^{ぱい}ないって。」と 言^いった。

月曜^{げつようび}日^び、 千葉^{ちば}先生^{せんせい}に 連^つれられて 教^{きょうしつ}室^{しつ}に 入^{はい}ってきた まりちゃんは、 きんちょうしてい
 て、 転^{てんこうせい}校^{こう}生^{せい}のようだった。

よかった、また、いっしょの クラスだね。 教^{きょうしつ}室^{しつ}の 前^{まえ}に 立^たっている まりちゃんに 笑^{わら}
 かけると、まりちゃんも わたしを 見^みて、ちっちゃく 笑^{わら}った。

まりちゃんが 転^{てんこうせい}校^{こう}生^{せい} みたいだったのは そのときだけで、授^{じゅぎょう}業^{ぎょう}が 始^{はじ}まると、元^{げんき}氣^きに 手^てを 挙^あ
 げて 発^{はつげん}言^{げん}するし、休^{やす}み時^{じかん}間^{かん}には 女^{おんな}の子^こ全^{ぜん}員^{いん}に 囲^{かこ}まれて、イギリスの 話^{はなし}を たくさんした。

初^{はじ}めの 何^{なんに}日^{にち}間^{かん}か、 まりちゃんの 周^{まわ}りは ざわざわ していたけれど、それも だんだん
 と おさまって、まりちゃんは、特^{とく}別^{べつ}な 人^{ひと}では なくなつた。

You were the last person I told I was moving, when I left for London.

So I decided when I return, I'd come to see you first," she said.

"I am going to start school on Monday, so we can hang out again," she added.

"I hope we will be in the same class again, but if not, let's still hang out, ok?", I replied.

We promised each other and said good-bye. If we think of goodbyes as something we can always encounter, this goodbye made me happy.

School changes classes in fifth grade. The new class will be bit different from the class we used to be in when Mari was here. I am worried that Mari might be lost in the class, I wish we could be in the same class again. I started to get worried and asked my mother.

"Well, it doesn't necessarily mean that you and Mari will be in the same class again, but I think she will get along with her class. You don't have to worry about her," she answered.

On Monday, Ms.Chiba brought Mari to the classroom. Mari looked nervous and she looked like a new transfer student.

Great! We are in the same class again. I smiled at Mari standing in front of the classroom. She smiled back at me, too.

It was for only a short time Mari was just like a transfer student. Once the class started, she raised her hand to speak. She talked about England a lot with all the girls in the class as they surrounding her during break time.

For the first few days, Mari's environment was quite unsettled, but soon she became like just another girl in the class.

それでも、何か ^{なに} 変な ^{へん} 気持ちが ^{きもち} してしまう。

お母さんの ^{かあ} 言ったとおり、 ^{なに} 何も ^{しんぱい} 心配なことは ^お 起こらなかった。もともと、はきはきと
して ^{げんき} 元気だった ^{まりちゃん} まりちゃんは、もっと、はきはきと ^{げんき} 元気な ^{おんな} 女の子に ^こ なっていた。そ
れは ^{すご} すごく ^{うれしい} うれしいことなのに、すなおに ^{よろこ} 喜ぶことが ^{できない} できない ^{じぶん} 自分に ^き 気づいて、わた
しは、^{じぶん} 自分が ^{すこ} 少し ^{いや} いやになる。

まりちゃんが、もっと ^{まりちゃんらしく} まりちゃんらしく ^{なった} なのだと、そう ^{おも} 思うのに、そう ^{おも} 思おうと ^{すれ} すれ
ば ^{する} するほど、わたしの ^し 知っている ^{まりちゃんでは} まりちゃんでは ^{ない} ないような ^き 気が ^{してしまう} してしまう。

そんな ^{ある} ある日の、^{かえ} 帰り道 ^{みち} での ^{こと} ことだった。

「おうい、^{まつした} 松下。」

^{おお} 大きな ^{こえ} 声に ^む ふり向くと、^{おな} 同じ ^{さかもとくん} クラスの ^{いきお} 坂本君が、^勢 勢いよく ^{かけて} かけてきた。しばらく ^な な
らんで ^{ある} 歩いていたら、

「おまえたち、^{あんなに} あんなに ^{なか} 仲が ^よ よかったのに、^{どう} どうしちゃったわけ。」と ^い 言った。まりちゃん
と ^{わたしの} わたしの ^{こと} ことだなんて、^{すぐ} すぐに ^{わか} 分かった。

「別に。 ^{なん} なんでも ^{ない} ないよ。」と ^{こた} 答えると、

「そうかなあ。 ^{すご} すごく ^{へん} 変だぞ。」と、また ^い 言った。 「^{へん} 変じゃ ^{ない} ないってば。」 ^{おお} 大きな

^{つよ} 強い ^{こえ} 声だった。わたしも ^{びっくり} びっくりした ^{けれど} けれど、^{さかもとくん} 坂本君は ^{もっと} もっとびっくりした ^{みたい} みたいで、

^{なに} 何も ^{しゃべ} しゃべらなくなって ^{しま} しまった。

わたしたちは ^だ だまったまま、それでも、^{なん} なんとなく ^{なら} ならんで ^{ある} 歩いていた。

「そうだよ。」

But something still made me feel uneasy.

Nothing worrying had happened with her as my mother said. Mari was naturally energetic and an outgoing girl and she became a more energetic and more outgoing. I know it is a good thing for her but I just couldn't help being a little jealous of her. I felt very small and didn't like myself.

I realized Mari became even more herself than ever and I should be happy for her yet I felt like she was a totally different person than I had known.

One day, on the way back from school, I heard a voice.

“Hey, Matsushita!”

When I turned my head around to a big voice, there was our classmate, Sakamoto rushing towards me.

We walked along together for a while and he started,

“What happened to you guys? You two were really close, right?”

I immediately knew he was talking about Mari and me.

“Nothing really.” I replied.

“Are you sure? You two look so strange.” He said again.

“Not strange at all!”

I said it in a loud and strong voice, and surprised even myself.

Sakamoto seemed even more surprised and stopped talking.

We just kept walking along without saying anything.

“That's it!”

今度は、坂本君が大きな声を出した。

「あのさあ、新しい野中なんだよ。野中を、新しい野中だと思えばいいんじゃないの。」

「えっ。」

わたしはびっくりして、坂本君の顔を見た。うれしそう、得意そうな顔をしている。

「だから、新しい友達だと思えばいいんだよ。」

坂本君はわたしを見て、そう言う、そうだよ、そうだよと言いながら、かけていってしまった。

「変なやつ。」

小さい声で言ってみた。それから、

「新しいまりちゃん。」

と、坂本君の言葉をつぶやいた。坂本君も、少しちがったまりちゃんを感じて

いたのかも、しれない。それとも、わたしたちのことを心配して、一生けんめい考えてくれたのかな。

新しい友達、新しいまりちゃん。前から知っていたまりちゃんを、初めて

知った子みたいに思うのは、なかなかむずかしそうだった。けれど、ほんの少し気持ち

ちは軽くなって、ありがとうって思った。坂本君、ありがとう。

ちょうど、その日だった。帰国した日にいきなり現れたように、約束をしていなかった

まりちゃんが遊びに来た。

「あっ、あたしの写真。」

つくえの上にかざってあった写真をみつけて、まりちゃんが大きな声を出した。

This time, Sakamoto shouted.

”You know, she is a new Nonaka(Mari)! you can just think of her as a whole new person .”

”What?”

I was surprised and looked at Sakamoto’s face.

He looked happy and proud.

“So you can just think of her as a new friend,” he repeated.

Sakamoto looked at my face and kept saying ‘yes, yes’ and then ran away.

”He is weird.” I muttered to myself.

And I repeated the words he said, ‘a whole new Mari.’

I wondered if Sakamoto also felt Mari changed from the Mari we knew and maybe he was worried about our friendship and tried to find the solution.

A new friend. A new Mari.

It seemed a little bit difficult to think of Mari as a girl who I had never seen before. But I felt a little better about it. I thanked Sakamoto.

It was just the same day.

Just like the day when she came back to Japan, Mari stopped by at my place out of the blue.

”Oh, it’s my picture.”

She found the picture of herself on my desk and said it out loudly.

「この クロッカスね、毎年^{まいとし}さくよ。 植え^うっぱなしでも さく、 とっても いい^こ子なんだ。」

まりちゃんの 言い^い方が おかしくて、わたしは 笑^{わら}った。

「よかった。」

ほっとした ように まりちゃんは 言^いった。

「どうしたの。」

「だって、前^{まえ}みたいに ひろが 笑^{わら}ったから。 ずっと、なんだか ちがう みたい^きな気が して たんだもん。」

「ほんとに そう思^{おも}ってたの。 それ、あたしの ほうだよ。」

「ちがうよ、あたしの ほうだよ。」

顔^{かお}を 見^みあわせて、わたしたちは 笑^{わら}った。 楽^{たの}しくて、気持^{きも}ちが よくて、たまらなかつた。

「今日^{きょう}さ、 帰^{かえ}り道^{みち}で、 坂本^{さかもと}君^{くん}が まりちゃんを 新^{あた}しい 友^{とも}達^{だち}って 思^{おも}えばって、言^いったんだよ。 一^{いっ}生^{しょう}けんめい 考^{かん}えて 思^{おも}いついた らしいけど、 坂本^{さかもと}君^{くん}に しては、気^きが きてるよね。」

「へえ。」

と 言^いったきり、まりちゃんは しばらく だまりこんで しまった。 それから、こう 言^いった。

「あたしは あたしだし、 ひろは ひろでしょ。 ほかの 人^{ひと}には なら^{おも}ないと 思うよ。 で もさ、新^{あた}しい 友^{とも}達^{だち}って いうのも、ちよつと いいかも しれないね。」

その夜^{よる}、あしたの したくを しながら、わたしは、ふふふと 笑^{わら}ってしまった。 あしたが

楽^{たの}しみだった。 前^{まえ}からの まりちゃんと 新^{あた}しい まりちゃんと、二人^{ふたり}の まりちゃんが ロンドンから や^きって来^きた みたい^いに 思^{おも}えたから。

"This crocus blooms every year. It blooms without any care. Very good girl."

I couldn't help laughing at the way she said it.

"Good."

Mari said it as if she was relieved.

"Why do you say so?" I asked.

"Because I'm glad you laughed like the way you used to. I've felt you slightly changed."

Mari answered.

"Did you really think so? I felt you changed, too." I said.

"No, I didn't. You did," she said.

We looked at each other and laughed. We both were very happy and pleasant (that we connected again).

"Today, on the way back home, Sakamoto told me that I just need to think of you as a new friend. He thought about it and he hit on the idea. I think it is pretty cool for Sakamoto."

"Aah." After saying that, she was silent for a while, and said,

"I will always be me and you will always be Hiro. We will always be ourselves, not anyone else. But 'a new friend' sounds pretty good."

That night as I prepared for class the next day, I couldn't stop smiling. I was excited to go to school the next day, because I felt that as if two Maris, the old one and a new one, had come from London.